

教育実習指導の効果に関する研究 (I)

—附属東雲小学校および同東雲中学校における実習生の意識変容に基づく検討—

林 武広 神原 一之 秋山 哲 奥野 正二
樽谷 秀幸 松前 良昌 川口 浩

1. まえがき

教育実習（以下、実習）の充実化は、従来から様々な検討がなされてきた。広島大学をはじめ国立の教員養成系大学・学部では実習が附属校で実施されているために、それぞれの大学で実習の充実化に向け、附属校と大学との連携により大学のカリキュラムや実習内容の改善等の取り組みが続けられている。

実習は教員免許法による教職系科目として学校種ごとに実習期間に基づいた単位が定められている。教育現場において実践的な経験を通し、教員としての実践的能力を培う場としての実習の重要性は言うまでもないが、その目標達成に対し、期間の長さ、実習生の担当数等において必ずしも十分でないとの指摘が従来からなされている。

しかし実習の期間については教員免許法に沿って設定されていることや大学のカリキュラムとの関係があるため、延長や短縮は困難である。また実習実施時期についても、大学の授業時期、附属校園の教育課程・学校行事の都合によって設定されるため、その変更もまた困難である。したがって、実習の充実化はこのような物理的な状況、つまりハード的な条件変更ではなく、実習担当校でなされる実習生への指導内容や実践など、いわばソフト面の検討と工夫が必然となろう。

2. 本研究の焦点

広島大学附属校園では各校園の歴史と伝統を活かし、かつ時代の変遷にも対応しつつ、それぞれの校園で実習の充実化のため、学校園単位、また各教科、教員単位でも様々な工夫を重ねている。むろん、上述のように実習のソフト面でのたゆまぬ工夫の必要性に鑑み、実習に対する意欲喚起をめざした実習科目の新設（木原ほか、2010）など、カリキュラムの改善が必要であることは言うまでもない。加えて、附属校園にお

ける実際の実習現場において、具体的にどのような指導や助言が実習生にとって有効であるのかを検証し、その結果を指導に活かすことも必要である。実習に関する最新の報告として、例えば橋本ほか（2010）は数学科において実習評価のあり方の改善を継続的に取り組み、6項目4段階の評価が有効であることを報告している。金子ほか（2010）は国語科における授業力獲得モデルの研究を継続的に進めており、古典単元での実習生の躓きの原因を解明し、その方策の提案等、より詳細な実習指導を提案している。また松浦ほか（2010）は英語科の実習のための到達目標設定とそのため評価シートの実効性を検討している。実習の指導においては、これらの報告にあるような個別の教科の特徴や独自性に焦点を当てた検討は同然のことながら、それぞれの学校単位での実習指導の文化として全教員が共有する全般的な指導指針や重点項目に焦点を当てた具体的検討もまた重要である。

そこで筆者らは附属東雲小学校（以下、東雲小）および附属東雲中学校（以下、東雲中）を調査フィールドとして、両校での実習開始時（以下、事前）と終了時（以下、事後）での実習生の意識変容から、附属校教員による実習指導および学校における各種の活動・実践等のインパクトや関連を統計解析によって検討することとした。具体的な方法として、広島大学実習委員会が例年行っているアンケートとは別に、両校で独自の事前、事後アンケート調査を企図し、2007年度に予備調査、2008年度から2010年度までの3年に渡り全実習生対象に実施してきた。なお調査した実習は中・高等学校実習Ⅰ～Ⅲ、と小学校実習Ⅰ・Ⅱとし、事前実習、事後指導、下年次の観察実習等は対象としない。ここでは、それらのうち最新の2010年度の分析結果に限定して報告する。

Takehiro Hayashi, Kazuyuki Kambara, Satoshi Akiyama, Masatsugu Okuno, Hideyuki Tarutani, Yoshimasa Matsumae and Hiroshi Kawaguchi: A study on the effect of teachers' guidance for student teachers at Shinonome Elementary & Jr. High schools, based on statistical analysis of pre- & post-questionnaires.

3. 東雲小および東雲中の実習指導

A. 東雲中

東雲中の実習は広島大学教育学部ほか（2010）による中・高等学校実習の手引きに述べられている目的の達成に向け、学校としての具体的目標として“教師を目指す意志が強固になること”を全教員が共有し、次に挙げる項目を重点的に促しながら指導に当たることとしている。このような目標を設けた理由として、必ずしも教職を目指しておらず、一つの資格として教員免許を取得したい実習生も少なくないことがある

- ①社会人としての自覚を持ち、勤務のルールを確実に遵守するよう努めること。
- ②自らの立ち振る舞い、態度など全てが教育であることを自覚すること。
- ③授業のみならず学校生活全体を通して生徒との関わりをできるだけ多く持つこと。
- ④授業作りでは、初めから指導教員に尋ねるのではなく、まず自分自身がしっかり考えることを前提とし、必要に応じて指導教員のアドバイスを請うこと。
- ⑤授業実践後の振り返りを大切にすること。
- ⑥指導内容の確実な理解を図ること。

本校での実習期間はわずか2週間ではあるが、各教科教員は上述の諸点に留意しつつ、できる限り授業実践の機会を多く設け、かつ、個々の実習生の状況に応じた指導を心がけている。また、学級活動、学校行事、クラブ活動指導、特別支援学級参観も義務づけており、学校の教育活動の実態を把握させ、教師としての総合的な資質向上を図るように取り組んでいる。

B. 東雲小

東雲小の実習は教育学部初等教育教員コースおよび特別支援教育教員養成コースの学生が中心であり、加えて、教育学部第2類～5類所属で副免として小学校免許取得を目指す学生も参加している。実習は広島大学教育学部ほか（2010）による小学校実習の手引きに述べられている目的の達成に向け、学校としての具体的目標として“将来の小学校教師としての自信と自覚が一層確固となる”ことを全教員が共有し、次に挙げる項目を重点的に促しながら指導に当たることとしている。

- ①社会人としての自覚を持ち、勤務のルールを確実に遵守するよう努めること
- ②自らの立ち振る舞い、態度など全てが教育であることを自覚すること
- ③授業のみならず学校生活全体を通して児童との関わりをできるだけ多くし、児童理解、児童との接し方などを習得すること

- ④授業づくりでは、初めから指導教員に尋ねるのではなく、まず自分自身がしっかり考えることを前提とし、必要に応じて指導教員のアドバイスを請うこと
- ⑤授業実践後の振り返りを大切にすること
- ⑥授業の方法のみに偏らず、系統性に留意しつつ指導内容の確実な理解を図ること

本実習の期間は初等教育教員養成コースが5週間、特別支援教育教員養成コース基礎免3週間、教育学部2類～5類では3週間である。実習期間の違いにかかわらず、常に上述の諸点に留意しつつ指導に当たっている。なお、実習生のクラス配当、授業担当の教科とその内容は、6月の時点であらかじめ決めており、教材研究などは本校の実習前に各自で準備することになっているため、授業実践は、あらかじめ計画されている日程に沿って進めている。授業実践では実際に児童の前に立って本格的に指導を行うことになるので、仮説的に立案した指導案の実践的検証の場でもある。したがって、授業の振り返りでは、そのことを踏まえた指導教員の指導を心がけている。

4. 調査内容

事前アンケートは、実習開始日に、事後アンケートは実習終了日にそれぞれ実施している。各実習生の実習前後の意識変容を調べるため、実習生には各自にオリジナルのシンボルマークを決め、事前および事後アンケートで同じものを記入するようにした。氏名を用いることによるバイアスを軽減し、回答の確度を上げるためである。回収後は事前、事後で記入されたマークを照合し、事前、事後の回答者を特定した。

事前アンケート

事前アンケートでは、両校とも教育現場で必要となる活動への意識を問う質問を設定した。その内容として、下記の①～⑳から、「自信がない、あるいは不安に思うことを」、さらに「自信があること」をそれぞれ強く思う順に3つ選択し、続いて「実習で達成したいこと」を自由記述とした。項目の設定は基本的に同じであるが、東雲小では「授業をどう進めるか」を加え、21項目とした。

- ①教科内容の知識・技能
- ②子どもとのコミュニケーション・会話
- ③授業のプラン
- ④子どもの考えの把握
- ⑤指導案をどう書くか
- ⑥教材・教具をどう選ぶか
- ⑦授業での発問
- ⑧板書
- ⑨授業での子どもの意見の取り上げ方
- ⑩学習でつまずいた子どもへどう助言するか
- ⑪授業の準備
- ⑫プリント・ワークシート等の資料作成
- ⑬子どもをどう注意するか・叱るか
- ⑭問題行動を起こす子への指導
- ⑮授業評価
- ⑯他の

実習生にどう接するか ⑰実習担当教員にどう接するか ⑱着実な勤務 ⑲クラブ活動等への参加 ⑳その他

事後アンケート

事後アンケートでは東雲小、東雲中で異なる形式、質問を設定した。

東雲中では上記の①～⑳について再び、「自信がついたこと」および「これからの課題」を強く思う順に3つを選択し、続いて実習で行った活動や達成に関する質問を設定した。自由記述以外は4件法での回答とした。

- ・達成したいと思っていたことは達成できたか
- ・指導教員の指導やアドバイスの有効性（下記6の小項目、それぞれについて回答）
授業の企画・指導案作成、扱う教材、生徒理解、板書・発問・指示・メディア活用などの指導技術、授業評価、その他有益であったこと（自由記述）
- ・特別支援学級の参観、授業参加が役だったか
- ・学級活動、クラブ活動などへの参加が役立ったか
- ・中学校教育で重要となる点はつかめたか
- ・この実習を終え、中学校で教壇にたつ気持ちが高まったか
- ・感想など（自由記述）

東雲小では、実習期間が長いこと、さらに教員養成コース所属の学生が主であることから、実習で行った活動および達成に関する詳細な質問を設定した。

- ・実習で最も印象に残ったこと（自由記述）
- ・自分にとって最も有意義であったこと（自由記述）
- ・子どもとの交流は円滑に行えたか（以下、4件法）
- ・実習開始時に個々で設定した実習での目標やめあてを意識して実習に取り組めたか（5件法）
- ・その目標やめあては克服できたか（5件法）
- ・授業に関し、次に挙げる力は身についたと思うか
授業を企画し指導案を作成する力、扱う教材の開発・研究力、子ども理解に関する力、板書・発問・指示・メディア活用等の指導技術、授業を評価する力（各4件法）
- ・指導教員の指導やアドバイスの有効性（各4件法）
授業の企画・指導案作成、扱う教材、子ども理解、板書・発問・指示・メディア活用の指導技術、授業評価
- ・今回の実習を終えて自ら新しい課題は見いだせたか（自由記述）
- ・小学校教育で重要となる点はつかめたか（4件法）
- ・この実習を終え、小学校で教壇にたつ自信がついたか（4件法）

- ・自信がないとすればどの点か（自由記述）
- ・感想など（自由記述）

5. 解析結果と考察

上記のように、実習生へのアンケート項目は多岐にわたっている。ここでは、特に以下の観点に絞って、アンケート解析の結果とその考察を記すこととする。

A. 東雲中（中・高校実習）の場合

(1) 実習前に「自信がないこと」こと、および「自信があること」にはどのような項目があるか

アンケートを集計した結果、実習を前に自信がない項目として、教科内容の理解・技能、授業のプラン、授業での発問、授業での子どもの意見の取り上げ方があがっている（表1）。中でも教科内容の理解・技能と授業のプランは突出しており、“最も強く思う”の事項中で最も多いうえ、この項目を第2、第3で選択した者の合計から、ほぼ半数の実習生が選択している。次いで、授業での発問、授業での意見の取り上げ方、子どもをどう注意するか・叱るか等、生徒とのコミュニケーションにかかわる項目となっている。一方、自信があることとして、着実な勤務が突出している。次いで、他の実習生とどう接するか、クラブ活動への参加となっている。概して言えば、実習の根幹をなす授業をどう作っていくかに対する自信のなさ、実習生間で協調しつつ着実な出席への自信が見て取れる。教科内容の理解・技能は、授業づくりの基本中の基本であり本

表1 東雲中事前アンケート結果

事前 N=104	自信がないこと				自信があること			
	1	2	3	項目計	1	2	3	項目計
① 教科内容の知識・技能	24.0	13.5	11.5	49.0	3.8	2.9	4.8	11.5
② 子どもとのコミュニケーション・会話	8.7	7.7	5.8	22.1	7.7	11.5	8.7	27.9
③ 授業のプラン	26.0	14.4	7.7	48.1	1.9	2.9	1.0	5.8
④ 子どもの考えの把握	7.7	6.7	5.8	20.2	1.9	1.0	2.9	5.8
⑤ 指導案をどう書くか	1.9	6.7	4.8	13.5	1.9	1.9	1.0	4.8
⑥ 教材・教具をどう選ぶか	1.9	2.9	4.8	9.6			1.0	3.8
⑦ 授業での発問	10.6	4.8	9.6	25.0			1.9	1.9
⑧ 板書		1.0	2.9	3.8	1.9	5.8	4.8	12.5
⑨ 授業での子どもの意見の取り上げ方	7.7	9.6	11.5	28.8	1.0	2.9	1.9	5.8
⑩ 学習でつまずいた子どもへどう助言するか	1.9	10.6	8.7	21.2		1.0	1.9	2.9
⑪ 授業の準備	1.0	3.8	5.8	10.6	3.8	4.8	1.0	9.6
⑫ プリント・ワークシート等の資料作成		1.0		1.0	1.9	6.7	5.8	14.4
⑬ 子どもをどう注意するか・叱るか	5.8	10.6	10.6	26.9		2.9	3.8	6.7
⑭ 問題行動を起こす子への指導	1.0	6.7	3.8	11.5				
⑮ 授業評価	1.0		3.8	4.8	1.0			1.0
⑯ 他の実習生にどう接するか					16.3	19.2	17.3	52.9
⑰ 実習担当教員にどう接するか					2.9	8.7	10.6	22.1
⑱ 着実な勤務			1.0	1.0	43.3	10.6	16.3	70.2
⑲ クラブ活動等への参加	1.0		1.0	1.9	10.6	16.3	12.5	39.4
⑳ その他			1.0	1.0				
合計	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	

表上段の1～3は強く思う順、各項目の数字は%

来大学で学んで来ているが、いざ教育実践の場へ対応する文脈で改めて不十分さを懸念したと考えられる。子どもとの関わりに自信が無いことは経験が無い、あるいは少ないことによるもので、正直な反応と思われる。

(2) 実習後に「自信がない」こと、および「自信あること」にはどのような項目があるか、その分布は実習前とどう変化しているか

自信はついたことでは、子どもとのコミュニケーションが突出しており、最も強く思う項目中で最も多く、この項目を第2、第3で選択した者の合計では、4割以上の実習生が選択している(表2)。続いて、授業プラン、指導案をどう書くか、プリント・ワークシートの作成など、教科内容の知識・理解など授業作りのプロセスに関する項目が選択されている。一方、課題となったことでは、教科内容の知識・理解が突出して多い。この項目を第2、第3の選択から。半数の実習生が選択している。実際に授業を行う場面に向き合うなかで、授業に内容に対する不足感を改めて実感したと考えられる。同様に授業での発問も4割以上の選択がある。また、子どもをどう注意するか・叱るか、子どもとのコミュニケーション、授業での子どもの意見の取り上げ方等も少なからずあがっている。事後での反応では、上記のように子どもとの直接的関わりに関係する事項で、これらに自信が持てたとの反応と課題

となったとの反応が概ね同じ程度の数で対をなしている。このことは、実際に子どもと関わり教えることを通し、自信が持てた者がいる反面、困難を感じた者も少なくないことを示すものであろう。

事前、事後の反応の分布を比較すると、授業内容の知識・理解の項目において、事前で自信がない、事後で課題と認識した者は、項目の計で約半数を占めている。これらのうち、事前で自信がないとし、事後で課題と認識した者は実数で28名であり、今回調査した人数のうち、約4分の1を占めている。また、事前で自信がない、事後で自信が持てたとした者は11名、事前では自信ありとし、事後で自信が持てないと認識した者は4名であった。授業での発問については、事前では自信がないとした者はごくわずかであったが、事後で課題と認識した者が大幅に増えている。実際に教壇に立ってみて、大勢の子どもに伝える難しさを実感した結果と思われる。

事前、事後の意識変化の概要をつかむために、回答数が少ないもの以外の項目について、全実習生を対象に事前、事後の反応をペアとしたノンパラメトリック検定(Wilcoxonの順位検定)を行った結果、授業のプラン(有意確率(両側)<.01)、子どもの考えの把握(同:<.05)、指導案をどう書くか(同:<.01)で事後での回答が有意に高い値を示すことが明らかとなった。また、板書(同:<.01)では事後が事前より有意に低い値を示す結果となっている。その他の項目では事前、事後で有意な変化は認められなかった。主としてこれらの項目において実習の指導成果があったと言えよう。

表2 東雲中事後アンケートの結果、図中の数字の意味は表1と同じ

事後 N=104	自信がついたこと				課題となったこと			
	1	2	3	項目計	1	2	3	項目計
① 教科内容の知識・技能	5.8	6.7	8.7	21.2	27.9	15.4	5.8	49.0
② 子どもとのコミュニケーション・会話	23.1	9.6	8.7	41.3	15.4	5.8	10.6	31.7
③ 授業のプラン	8.7	12.5	9.6	30.8	3.8	9.6	8.7	22.1
④ 子どもとの考えの把握	6.7	6.7	6.7	20.2	4.8	10.6	2.9	18.3
⑤ 指導案をどう書くか	12.5	9.6	9.6	31.7	2.9	3.8	3.8	10.6
⑥ 教材・教具をどう選ぶか	1.9	4.8	6.7	13.5	2.9	3.8	8.7	15.4
⑦ 授業での発問	1.9	5.8	3.8	11.5	13.5	13.5	15.4	42.3
⑧ 板書	1.0	2.9	1.0	4.8	1.9	4.8	3.8	10.6
⑨ 授業での子どもの意見の取り上げ方	4.8	2.9	8.7	16.3	6.7	10.6	5.8	23.1
⑩ 学習でつまづいた子どもへどう助言するか	2.9	1.9		4.8	1.9	6.7	9.6	18.3
⑪ 授業の準備	4.8	2.9	5.8	13.5	3.8		3.8	7.7
⑫ プリント・ワークシート等の資料作成	4.8	13.5	4.8	23.1		1.0	1.9	2.9
⑬ 子どもをどう注意するか・叱るか	1.9		3.8	5.8	10.6	9.6	12.5	32.7
⑭ 問題行動を起こす子への指導		1.9	1.0	2.9	1.9	1.9	2.9	6.7
⑮ 授業評価		3.8	2.9	6.7		1.0	3.8	4.8
⑯ 他の実習生にどう接するか	3.8	3.8	7.7	15.4				
⑰ 実習担当教員にどう接するか		3.8	1.9	5.8				
⑱ 着実な勤務	14.4	3.8	5.8	24.0				
⑲ クラブ活動等への参加		2.9	2.9	5.8	1.0	1.0		1.9
⑳ その他	1.0			1.0	1.0	1.0		1.9
合計	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	

(3) 実習を終え、中学校の教壇に立つ気持ちが高まりと教員の指導のどの内容と関連が深いのか

東雲中の実習の目標としている中学校の教壇に立つことへの意志の高まりを検討してみた。「中学校で教壇に立つ気持ちが高まったか」の回答分布は、全く高まらなかった:2.9%、あまり高まらなかった:34.6%、かなり高まった:39.4%、非常に高まった:22.1%、無回答:1%であった。肯定的回答が6割を超えており、目標到達はまずまずの結果と言えよう。次に、そのことに対する本校教員の実習指導の寄与について、「中学校で教壇に立つ気持ちが高まったか」を従属変数、「授業の企画・指導案作成」、「扱う教材」、「生徒理解」、「板書・発問・指示・メディア活用などの指導技術」、「授業評価」を独立変数として、最適尺度法による分析を行った。その結果、重要度において授業評価が最も高く(.330)、次いで板書・発問・指示・メディア活用などの指導技術(.258)との結果が得られ

た。つまり、実習生が行った授業の評価および実際の指導技術の手ほどきが実習生にインパクトを与えたと考えられる。

なお、「中学校で教壇に立つ気持ちが高まったか」と「中学校教育で重要となる点はつかめたか」の回答についてもSpearmanの ρ を求めた結果、両者は無相関ではないが、相関があるとまでは言えない結果が得られた。つまり中学校教育の重要点をつかむことと教壇に立つ意欲とは必ずしも関連せず、中学校での重要点の把握が、自分にはできそうもない等の否定的な意志を促進した可能性もうかがえる。

B. 東雲小（小学校実習）の場合

(1) 実習前に「自信がない」こと、および「自信あること」にはどのような項目があるか

授業をどう進めるかが自信がないことで最も多く、この項目を第2、第3で選択した者も合わせると4割5分、また、同様に授業での発問では4割以上、子どもをどう注意するか・叱るかでは5割に達している。子どもとのコミュニケーションも少なくない（表3）。一方、自信があることでは、東雲中の場合と同じく、着実な勤務を最も強く思うと回答した者が最も多い。この項目を第2、第3で選択した者も合わせると6割を超えている。次いで、子どもとのコミュニケーションがあがっており、この項目で第2、第3を選択した者も合わせると約5割の選択がある。その他、プリント・ワークシート等の作成やクラブ活動への参加などが選択されている。教科内容の知識・理解も選択があるが、その割合は高いとは言えず、東雲中での中・高校実習と対照的である。また、子どもとの関わりに関連する項目に自信を持つ傾向も見取れ、小学校教員をめざす者の特質かもしれない。

(2) 目標やめあてを意識して実習に取り組んだ程度と目標の克服の程度に関連があるか

「実習開始時に個々に設定した実習での目標やめあてを意識して実習に取り組めたか」と「その目標やめあては克服できたか」について、クロス集計した結果

表3 東雲小の事前アンケート結果、表中の数字の意味は表1と同じ

事前 N=84	自信がないこと				自信があること			
	1	2	3	項目計	1	2	3	項目計
① 教科内容の知識・技能	3.6	8.3	3.6	15.5	6.0	1.2	3.6	10.7
② 子どもとのコミュニケーション・会話	10.7	1.2	11.9	23.8	26.2	13.1	9.5	48.8
③ 授業のプラン	7.1		6.0	13.1	1.2	2.4	6.0	9.5
④ 子どもへの考えの把握	8.3	3.6	4.8	16.7		1.2	3.6	4.8
⑤ 指導案をどう書くか	1.2	1.2	3.6	6.0	2.4	6.0	6.0	14.3
⑥ 教材・教具をどう選ぶか	1.2	1.2		2.4	1.2	2.4	1.2	4.8
⑦ 授業での発問	15.5	14.3	11.9	41.7			2.4	2.4
⑧ 板書	1.2	4.8	4.8	10.7	2.4	2.4	6.0	10.7
⑨ 授業での子どもの意見の取り上げ方	13.1	11.9	11.9	36.9	1.2	3.6		4.8
⑩ 学習でつまづいた子どもへどう助言するか	2.4	6.0	6.0	14.3	3.6	2.4	1.2	7.1
⑪ 授業をどう進めるか	21.4	16.7	8.3	46.4	1.2	2.4	1.2	4.8
⑫ 授業の準備			1.2	1.2	3.6	8.3	6.0	17.9
⑬ プリント・ワークシート等の資料作成		2.4	1.2	3.6	6.0	11.9	8.3	26.2
⑭ 子どもをどう注意するか・叱るか	9.5	21.4	19.0	50.0		1.2	1.2	2.4
⑮ 問題行動を起こす子への指導	1.2	3.6	1.2	6.0	1.2			1.2
⑯ 授業評価	1.2	1.2	2.4	4.8		1.2	2.4	3.6
⑰ 他の実習生にどう接するか			2.4	2.4	1.2	2.4	3.6	7.1
⑱ 実習担当教員にどう接するか					3.6	7.1	7.1	17.9
⑲ 着実な勤務		2.4		2.4	34.5	15.5	14.3	64.3
⑳ クラブ活動等への参加				0.0	3.6	13.1	8.3	25.0
? その他	2.4			2.4	1.2	2.4	8.3	11.9
合計	100.0	100.0	100.0		100.0	100.0	100.0	

を表4に示す。両者の回答傾向には偏りが見られる。そこで χ^2 検定を行わずノンパラメトリック検定を行いSpearmanの ρ を求めた結果、0.546が得られ、相関があることが明らかとなった。目標やめあてを意識して実習に取り組むことが、その達成に重要であることを示している。

(3) 実習を終え、小学校の教壇に立つ気持ちが高まりと教員の指導のどの内容と関連が深いか

東雲小の実習の目標、小学校で教壇に立つ自信を高めることについて検討を行った。まず、「この実習を終え、小学校で教壇に立つ自信がついたか」に対する回答分布は、全く無い：0%、あまり無い：31.0%、ある程度ついた：56.0%、非常についた：13.1%であり、肯定的回答が約7割を占めていることから目標は達成することができたとみなされる。次に「この実習を終え、小学校で教壇に立つ自信がついたか」を従属

表4 東雲小 目標意識と目標達成のクロス表

度数		目標やめあては克服できたか				合計
		少し克服できた	まあまあ克服できた	かなり克服できた	十分克服できた	
実習開始時に個々に設定した実習での目標やめあてを意識して実習に取り組めたか	全く意識していなかった	0	1	0	0	1
	たまに意識していた	11	3	1	0	15
	時々意識していた	17	17	2	0	36
	かなり意識していた	3	16	7	2	28
	常に意識していた	0	0	4	0	4
合計		31	37	14	2	84

変数、指導教員の指導やアドバイスに関する「授業の企画・指導案作成」, 「扱う教材」, 「子ども理解」, 「板書・発問・指示・メディア活用の指導技術」および「授業評価」を独立変数として、最適尺度法による分析を行った結果、重要度において子ども理解 (.524) が最も高く、次いで授業の企画・指導案作成 (.323) との結果が得られた。つまり、授業および学校生活の各場面で、子どもをどう理解するかに対する教員のアドバイスが実習生に最も強いインパクトを与えたと考えられる。小学校の授業づくりでも、子ども理解を前提に指導するので、これらは相互に関連が深いと考えられる。

次に東雲小、東雲中両校の結果を合わせて考察してみる。

両校とも、実習生の子どもとの関わりが一つの鍵となっており、実習指導で意識して指導する必要がある。また、東雲小の教員がよく指摘している実習生の教科内容の理解不足や教科内容へのこだわりの無さは、東雲小実習生自身が実習後においても十分に認識できていない実態から明らかとなった。東雲中では実習前より実習後に、そのことの不足を認識した実習生が多いことと対照的である。このことは初等教育、中等教育の文化の違いを反映すると考えられるが、初等教育といえども、子どもとうまく関わり、ケアすればよいのではなく、教育内容の深い理解に基づいた授業作りをめざして欲しいものである。それは小一中の円滑なつながりを推進するうえでも重要であるので、大学の教員養成教育改善への示唆になればと考える。

6. あとがき

本報告は2010年度に東雲小と東雲中で実施した実習について、実習生の属性に関する配当学年・学級、教科、主免・副免、初めてあるいは2校目などの違いは考慮していない。この点については先に述べた各教科の報告を参照されたい。本報告はあくまでもそれぞれの学校全体としての実習成果を実習生のアンケート解析から検証したものである。別の見方をすれば、学校単位での実習の“指導評価”の側面を有している。その点で東雲小、東雲中とも、実習指導の目標は概ね達成できたと考えている。

今回の分析結果で明らかとなったことは、特に新しいものは無く、常日頃、両校の教員が述べていることに他ならない。その意味で今回の結果の大半は、教員の経験知に基づく実習生や実習指導への思いや認識に対し一つの証左を与えるものと考えられる。しかし、こ

で述べてきた報告は、実施した調査の全てを網羅してはいない。さらなる詳しい解析と新たな調査を進め附属校として最も有効な指導を見極め、効果的な指導を行うためのポイントを探求したいと考える。

引用文献

- ・金子直樹・江口修司・金尾茂樹・石井希代子・重永和馬・川中裕美子・村山太郎・井上 泰・竹盛浩二・竹村信治・川口隆行・小西いずみ・佐藤大志・間瀬茂夫・佐々木勇・山本隆春(2010)：これからの教育実習—国語科における教育実習指導の研究(5)「授業力獲得モデル(一般・単元別)の策定(Ⅲ)」—, 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第38号, pp33-39.
- ・木原成一郎・磯崎哲夫・松浦伸和・井上 弥・伊藤圭子・谷本忠明・山口武志・長松正康・森田英樹・田中宏幸・畑佐由紀子・草間益良夫・横田明子・高旗健次・井戸川豊・深澤広明・松下姫歌・池田隆・入川義克・金丸純二・時永益徳・神野正喜・大松恭宏・宮里智恵・河野芳文・原田良三・島本靖・木本一成・三藤義郎・竹盛浩二・河野 進(2010)：「特色ある教育実習プログラム」の実施に関する研究(Ⅲ)—「教育実習指導A」および「教育実習指導B」の効果に関する研究—, 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第38号, pp19-25.
- ・橋本三嗣・青谷章弘・井上芳文・岡留優介・吉田英昭・河野芳文・砂原 徹・富永和宏・森脇政康・今岡光範・小山正孝・下村 哲(2010)：教育実習の評価のあり方の改善について—数学科における到達目標を明確にした評価の改善—, 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第38号, pp55-60.
- ・広島大学教育学部・同附属小学校・同附属東雲小学校・同附属三原小学校(2010)：小学校教育実習の手引き(平成22年度版).
- ・広島大学教育学部・同附属中・高等学校・同附属東雲中学校・同附属三原中学校・同附属福山中・高等学校(2010)：中・高等学校教育実習の手引き(平成22年度版).
- ・松浦伸和・小野 章・池岡 慎・大野 誠・川野泰崇・千菊基司・多賀徹哉・山岡大基・山田佳代子・幸 建志(2010)：英語科における教育実習の到達目標の設定(Ⅲ), 広島大学 学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 第38号, pp69-74.